

# 縄紋時代竪穴住居跡 埋没過程の研究

Study of the Burial Process of House-Pit Vestiges of the Jomon Period

小林謙一

KOBAYASHI Ken'ichi

- ① 研究の目的と経緯
- ② 事例検討
- ③ 埋没にかかる時間
- ④ 成果と課題

## 【論文要旨】

縄紋時代の居住活動は、竪穴住居と呼ばれる半地下式の住居施設が特徴的である。竪穴住居施設は、考古学的調査によって、主に下部構造（地面に掘り込まれた部分）が把握され、その構造や使用状況が検討されている。竪穴住居のライフサイクルは、a 構築地点の選定と設計から構築（掘込みと付属施設の設置）→ b 使用（居住・調理・飲食などの生活）→ c 施設のメンテナンス（維持管理と補修・改修・改築）→ d 廃棄として把握される。住居廃棄後は、そのまま放置される場合もあるが、先史時代人のその地点に対する係わりが続くことが多く、d' 廃棄住居跡地を利用した廃棄場・墓地・儀礼場・調理施設・石器製作などに繰り返し使用され、最終的にはe埋没（自然埋没・埋め戻し）する。以上のような、ライフサイクルのそれぞれの分節が、どのくらいの時間経過であったかは、先史時代人の居住システム・生業・社会組織の復元に大きな意味を持つ。住居自体の耐用年数または居住年数、その土地（セツルメント）に対する定着度（数百年の長期にわたる定住から数年程度の短期的な居住、季節的居住地移動を繰り返すなど）、背景となっている生業（採集狩猟・管理栽培や焼畑などの半農耕）や社会組織（集落規模、階級など）の復元につながる。

住居のライフサイクルの分節ごとの時間経過を把握することにより、居住システムとしての把握が可能となるだろう。その目的で住居出土試料を炭素14年代測定するうえで、セツルメントとしてのライフサイクルの位置を整理して把握することが重要である。今回はライフサイクルのdとした住居廃絶後の廃棄行為の時間・住居跡地埋没の時間を検討する。

その検討対象として、井出上ノ原遺跡、梅之木遺跡、力持遺跡、三内丸山遺跡の竪穴住居覆土中出土試料の炭素14年代測定事例を取り上げる。このうち井出上ノ原遺跡45号住居跡は住居使用時から埋没まで250～300年以上の時間が経過していることが指摘できた。これに対し、遺構の遺存状況などに問題があるが現存の状況から検討する限り、梅之木遺跡18号住居跡は比較的短期間に埋没していることが推測された。これらの検討により、住居埋土の埋没にかかる時間経過を探るとともに、炭化物の包含状態や土器・石器などの廃棄行為のあり方を重ね、集落内における竪穴住居跡地の利用について考えていく必要性が改めて指摘できた。

対応するライフサイクルとそれに対比した形での年代測定結果の分析を考古学的に検討しつつ、多数の測定結果を蓄積したい。

【キーワード】 縄紋時代 Jomon Period 炭素14年代 radiocarbon-dating 竪穴住居 house-pit